
死の願望

トニーアルメイダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死の願望

【Zコード】

N1376M

【作者名】

トニー・アルメイダ

【あらすじ】

自殺願望のある少年と殺人願望のある少女

二人はまったく別々のなにもない日々を繰り返していた。

そんな二人を1通のメールが引き寄せる。

自殺願望（前書き）

誰でも一度は「死にたい」という願望を持ちます。

しかし「生きたい」という生存本能がそれを邪魔します。

その生存本能に勝るほど追い詰められていない少年が死という願望を手にする可能性と出会い、人生が変わっていく姿を描いた小説です。

文章やストーリーは稚拙な部分が目立ちますが読んでいただければ嬉しいです。

「死にたい・・・」

僕がそんな願望を抱いたのは中学3年生の時だった。

理由は至つて単純、人間関係の崩壊である。原因は金銭的なトラブルで3ヶ月前に返したはずの2000円を再び請求されたことだ。今ならそんなはした金すぐ返せるし、別に失くしたところでそれほど痛手ではない。しかし中学生にとっての2000円というのは莫大な金で、返したはずなのに請求でもされようものなら頭に思い浮かぶ言葉は一つ「ふざけるな」だ。

僕はそいつの顔面に一発思いつき右ストレートをぶちました。スカツとした。それと同時に僕の友達関係と学校生活は崩れさつた。学校内での唯一の友達（相手がそう思っていたかは疑問だが）がいなくなってしまったのだ。

その日からはひたすら地獄の様な日々が続いた。

心の中には大きな空洞ができた。朝起きてから寝るまでの時間を単純作業のように繰り返す日々、

僕は本当に生きているのだろうか？

僕は僕と関係できているのだろうか？

僕は僕の体と、僕の周りの人々と関係できているのだろうか？

そんな事を考えながら繰り返す日々、それが僕の人生だった。

死にたい・・・

街にはあらゆる死の可能性が転がっている。車、電車、屋上、チンピラ、しかし一度として自殺を試みたことはなかった。なぜなら自殺に至るまで追い詰められていなかつたからだ。

人は追い詰められれば自殺に至る。だが僕は追い詰められていない、ひたすら空白な日々、単純作業の様に生きていく毎日だった。

そんな僕が自殺などという大それた行動も取れるはずもなく「死にたい」という願望が生存本能に勝てずにいた。こんな風に生涯を終えるのだろうか、、そう思つていた。
あの日までは、、

殺人願望（前書き）

我ながらストーリーと文章が稚拙だと感じましたね――

殺人願望

「殺したい・・・」

いや、正確には死を目撃したい……私がそんな願望を抱いたのは中学2年生の時だった。

その当時の私はクラスの男子連中からいじめられていた。理由は不明。そもそも理由なんてものが本当に存在するのかも怪しかつた。毎日毎日地獄の様な日々が続いていた。朝学校に登校し、靴箱を開けると必ず何らかのサプライズな贈り物が入っていた……牛乳パック、ペットボトル、蛙の死骸、種類は様々だ。

教室に入ると後ろの席の男子が私に聞こえるように私の悪口を言い合っていた。「キモイ」「ブサイク」そんなベタな悪口ではない。もつとダイレクトに心に突き刺さる言葉だった。そんな仕打ちを受けながらも、私は報復行為などする勇気もなかつた。

ただひたすら、脳内でクラスの連中を皆殺しにしていた。殺害方法は刃物で内臓をえぐりだしたり、重火器で頭を粉々にしたりと様々だ。しかし一度全員殺害してしまえば現実に戻される。そして、自分が脳内でしか復讐することができない臆病者だと自己嫌悪する。当時の私はそんなクソ食らえな日々を繰り返していた。しかしある日、私の人生に革命が起こる。それは学校の下校途中のことだった、私が通学路を歩いていると突如上空から巨大な物体が落ちてきたのだ。一瞬それがなにか分からなかつた。しかしその正体が分かつた瞬間、周りの人間は悲鳴を上げた。

落ちてきた物体は人だつたのだ、誰かがビルの最上階から自殺した。本来ならパニック状態になつてもいいはずなのに私は自分でも驚くほど冷静だつた。そこらじゅうに飛び散つた内臓、耳、そして返り血を浴びて、血まみれになつた自分の姿を見て私は興奮した。これが人の死？ なんて美しいんだろうか！ なんて爽快なんだ

ろうか！ もつと見たい！ そんな願望は月日を重ねる」とにいつしか、殺人願望へと変わつていつた。

しかし殺人は罪だ。法でそう定められているからではなく、私の中でも殺人は重罪だ。理由はいたつて単純、被害者の遺族が悲しむから、被害者の友人が悲しむから、被害者の恋人が悲しむから、被害者は生きたがっているから。そこらへんの常識を分かつてている分まだ私は常識人なのかもしぬれない。そんな事を考えながら3年の月日が過ぎていった。

殺人どころか、結局あの時以来人の死に遭遇することすらできていない。それどころか中学時代のトラウマで男性不信になってしまい、どんなに優しく接してくれても敵視してしまう。

単純作業の様に生きていく毎日、そんな日々を繰り返しているうちに私の心には大きな空洞ができてしまった。

……私は私と関係できているだろうか？

……私は私の周りの人々と関係できているだろうか？

……私は世界と関係できているだろうか？

もしかしたら私の人生はこのまま終わってしまうのだろうか？

そんな事をいつも考えていた。今だつてそうだ。レンタル店でいつものようにスラッシュシャーモービーをレンタルした。当初は「テキサスチーンソー」をレンタルしようと思っていたが生憎レンタル中だったの「ハロウィン」をレンタルした。家に帰ろうとしたその時だつた、1通のメールが届いた。

知らないメールアドレスだつた。

「明日は学校行けない」おそらく間違いメールだつ、普段なら何の迷いもなく無視するのだがどういうわけか私は返信した。

「間違いメールだよ、友達と間違えた？」なんで余計な文を追加したのだろうか？ よほど自分が暇なんだと改めて実感した。

「ごめん間違えちゃつた、友達というかノート借りてる知り合いにメール送つたつもりなんだつたんだけど……」

「へえ～ なんだ、高校生？」

なに聞いてんだか、我ながらあきれる。

「そうだよ、君は？」

「私も高校生だよ。」

「そりなんだ！じゃあや、よかつたらメル友にならない？
は？ メル友？ 飛躍しそうじや、いや、でも暇つぶしにはいい
かな。

「いいよー！ でもつまんない女だよー」

「はは、俺もつまんない男だよ、これからよろしく
これが私の人生の2度目の革命の始まりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1376m/>

死の願望

2010年10月8日12時38分発行